季節風季の始まりだという意味では前者がよく，海上では荒天になるという意味では後者がよい．沖縄で夏至南（カーツバイ）と称され，夏至より約15日間ぐらいを南風の強い時期としているが，カーツバイによって，やはり梅雨があけるとしているのを見ると，当地のアラバイと同じものであろう．

**註9**　名瀬における年間最高気温

①出現期日の分布

第3表　最高気温出現期日の分布

| 旬＼月 | V | VI | VII | VIII | IX | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 上 | 0 | 0 | 18 | 7 | 2 | |
| 中 | 1 | 1 | 9 | 5 | 0 | |
| 下 | 0 | 5 | 7 | 3 | 0 | |
| 計 | 1 | 6 | 34 | 15 | 2 | 58 |

②最高気温の植値（35.0°C以上）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 36.5°C | 1953 | VII | 7 |
| 36.3 | 1942 | VII | 38 |
| 35.8 | 1955 | VII | 6，5 |
| 35.6 | 1941 | VII | 7 |
| 35.5 | 1925，1926 | | |

③最高気温の低い年（32.9°C以下）

| | |
|---|---|
| 32.5°C | 1899 |
| 32.6 | 1907 |
| 32.7 | 1904 |
| 32.9 | 1911 |

**註10**　テダは太陽，日射の意

**註11**　霖雨について

またはっきりあらわれる年と，あらわれない年とがあり，季節のひとつとして霖雨をもうけることは一考を要する所である．

また（註7）の豪雨の原因参照

**註12**　沖縄では十月夏ガマと呼んでいる．

**註13**　ノーは糸，クタは朽ちるの意．天気がつづき毎日釣にゆくので，釣糸が朽ちるほど良い天気がつづくという意味である．

**註14**　ウナンは牝牛，ドレは凪の意．徳之島の牝牛が，沖永良部島に売られていった仔牛の啼声に心ひかれて，海を泳いでいったという話から，牝牛が泳いでゆけるほど静かな海だという意．

**註15**　桜の開花について

彼岸桜の開花は平年発現月日は1月16日（統計年数21年）満開は2月9日（統計年数20年）となっているが，開花と同時に若葉もでてくる．

## むすび

気象に基礎をおく季節の分類は，天文学的分類とちがい，いろいろ困難な点を伴うがより実用的なものであって，その土地との結びつきが大きいのを目的とする．土地の天候や気象に関係したことばの調査は，気象資料による季節の分類にあたって有力な補助手段となろう．この見地から奄美大島のこのようなことばを調査整理し，参考としつつ，季節の分類をおこなった，その結果だけをことばを主として紹介してみた．もっと完全な分類や，本土の季節との差については後日の機会にゆずりたい．

ここに紹介したことばのうち，その半数は鹿児島県大島支庁の奥山真義氏におうた．またいろいろ御指導と便宜をいただいた比嘉所長やその他のかたがたに対しても厚く御礼申しあげます．

# 新刊紹介

**火災便覧**　日本火災学会編

**B6判 1620頁　特価 1,800円　理化書院発行**

**コロナ社発売**

火災学会で編集した火災便覧がとうとうでき上った．紹介者は火災学会の中でこの企画が初まってから，ずっとその一部分のお手伝いをして来たので，完成の喜びは一層である．それでこれの批評ではなくて紹介を敢えて買って出たわけである．

ハンドブックや便覧は専門別にいろいろできている．ことに電気工学ハンドブック等は30年近い歴史をもっていて3回の改訂が行われ，すでに定評のあるものである．本便覧は最初の第1版であるから内容の精粗不揃いという点，項目に若干の脱漏がありはしないかという懸念等もないことはないが，まずわれわれの予期以上のできばえである．これは原稿の校閲やゲラの校正に中心となって骨を折られた編集委員の献身的な御苦労の結果でもある．紹介者が分担した部分の校正刷の場合にも，内容にいささかの不審でもあるとチャント赤でリマークがついて廻って来るので，これだけ気を配って見ていられるのだから，この便覧は相当いいものになるなというのが，その時からの期待ではあった．

内容は第1編から第12編までと附録としての資料編とがある．各編の題目を挙げて見ると基礎科学，火災気象，統計，火災危険，建築火災現象，消火通報設備，建築防火，都市防火，消防，森林火災，犯罪と火災，規程類となっている．第1編の基礎科学はわれわれに一番参考になる編であろう。この編の主査は金原寿郎博士で7人の分担執筆で，内容は温度測定，熱量測定，各種発熱現象，輻射，熱伝導，熱気流，燃焼の化学，木材の燃焼（この中には木材の含水量のこともある），消火法の種類，危険性化学薬品にわたっている．便覧であるから文章は簡潔に，必要な表や式や図はできるだけもり込む方針がぐられている．編中の各章の終りには引用した表や式や図の文献がまとめて挙げてあるのは行き届いた配慮である．

第2編は紹介者が編主査で4名の分担執筆であるが，この編については気象の専門家からのいろいろの批評があるものと覚悟している．第3編統計の内容は第1章が統計数理，第2章以下に出火度数，出火原因等の実際の火災統計と日本の大火の統計とがある．火災危険以下の各編でも気象の関係が思わぬ所に飛び出して来て紹介者自身ちょっと驚いた点もある．

第10編森林火災は武田京一博士が主査となり林業試験場関係の執筆者でまとめられたので，その方面の資料が十分に入り，われわれには大変便利である．例えばちょっとさがして見ても林の防火力と耐火力とか，林地推積物の含水量と可燃性とか，迎え火とか，防火線等という項目が眼につくのである．第11編は犯罪と火災で，ここにもちょいちょい気象関係が顔を出す．実況検分や発火部認定方法等の章があり，放火犯捜査の端緒に関する実例，放火犯取調上の留意点，放火および失火に関する刑法の解説に及んでいる．もし本便覧を読み物として見るならこの編が一番興味が深いであろう．

この便覧を個人で購入されることはむつかしいことかも知れないが，内容は上記のようで，手近かにあれば甚だ便利なものであることは確信する．会員の所属の機関毎に備えられるよう希望に堪えぬものである．

（畠山久尚）